

学 年 通 信 第三号

平成24年2月29日

明秀学園日立高等学校 第3学年



早春の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。
明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。白梅への道標である校訓を日々実践していますか。「やるからやる気が出る」を実感していますか。そして、挨拶や手伝いを習慣化していますか。

第三号は諸君の「個性感」を切り崩しつつ「学問のすすめ」の論を進めたい。いよいよ卒業です。まずは読みなさい。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。

個性とは何か

－「個性を生かす」と「個性の尊重」－

「各学校においては、法令及びこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする。

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」

これは平成10年12月14日に発表され、平成14年4月1日から施行された、小、中学校学習指導要領の第1章総則にある教育課程編成の一般方針の第一項目です。高等学校の一般方針にもほぼ同様の内容が謳われています。諸君のこれまでの学校生活は、この学習指導要領による教育活動の中にほぼどっぷりと浸かったものでした。

ここで注目したいのは、「個性を生かす」という表現です。この「個性を生かす」という文言には「嫌いを作らず」「好きを伸ばし」特定の人だけでなく全員がエリートになってほしい(「21世紀の教育はこうなる」寺脇研)という意図が盛り込まれていました。今後いろんな分野の「エリート」が必要になってくるので、好きな分野の力を伸ばしてその道のエリートに育てほしいと。そのための「個性を生かす」という表現でした。これまでのように特定の人だけがエリートになるのではなく、全員が自分の個性を生かした分野でエリートになるよう育てていこうというのが諸君の教育課程の本旨でした。ただ、この教育課程には「勉強するかしないかは子どもたちが自己決定できる立場において、その結果勉強をしなかった、成績が悪かったというのは、自分の責任ですよ、ということです。」(同 寺脇研)と教育の世界にも新自由主義が入り込んでいることがはっきりと示されていました。

注目すべきもう一つのキーワードは『教育振興基本計画(教育基本法第17条第1項の規定に基づき、教育の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため政府が平成20年7月1日に閣議決定)』施策の基本的方向のその2にある「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として社会の一員として生きる基盤を育てる」の「個性を尊重」という表現です。これはそれから遡ること12年、平成8年7月の『21世紀を展望した我が国のあり方について』と銘打った中教審の第一次答申にも「教育において一人一人の個性をかけがえのないものとして尊重し、その伸張を図ることの重要性はこれまででも強調されてきたことであるが、今後の〔生きる力〕をはぐくんでいくためにも、こうした個性尊重の考え方は、一層推し進めていかなければならない。そして、その子ならではの個性的な資質を見だし、創

造性等を積極的に伸ばしていく必要がある。こうした個性尊重の考え方に内在する自立心、自己抑制力、自己責任や自助の精神、さらには、他者との共生、異質なものへの寛容、社会との調和といった理念は、一層重要視されなければならない」とはっきり個性尊重とそこに内在するとしたものをいっそう重要視すると明言しています。どうやら「個性を生かす」教育と「個性尊重」の教育が、特にこの十数年来の一連の教育改革で一層の進展を図られてきたものであることは間違いないようです。

実は、「個性を生かす」ことと「個性の尊重」が本来の趣旨から離れ、教育活動の中で一人歩きを始めます。そう考えざるを得ない状況を呈することとなった要因に、日本の社会がどのように「個性」を認知したかということが挙げられます。我々の社会が「個性」をどのように捉えたか。大人達も挙(こぞ)って「個性」に対し、ある幻想を抱いているようなのです。

－「個性」とは生まれながらにして備わっているか－

ある幻想とは、「個性は生まれながらにして備わっており、それが成長に従って表出されていく」というものです。オンリーワン幻想とでも言いましょうか。諸君の中にはもしかすると「えっ、そうじゃなかったの」と虚を突かれている人がいるかも知れません。遺伝子レベルで見れば確かにオンリーワン(DNA配列が同一である可能性は4兆7000億人に一人 ウィキペディア)ですが、「個性」は生まれながらにして備わっているものであるという見解に私は異を唱えます。

「個性という考え方は西洋から入ってきたものです。キリスト教では人間を「神に似せてつくられたもの」としていて、神学ではそれを「ペルソナ」と呼んでいます。それがパーソナリティ(個性)の語源です。つまり西洋では、人間はしっかりとした個性をもっているものと認識されているんです。

でも、東洋では「自分」という言葉に象徴されるように、人間を「自然の分身」ととらえています。この自然というのは、コントロール不能なものです。ですからその自然の一部ということは、私たちは確固とした存在ではなく、揺れている存在だということです。揺れるとは、変化することですね。」この「人は変わる」という考え方があるからこそ、教育や修行をする意味があるんだと思います。(玄侑宗久 公式ホームページ)

「個性」は戦後教育によってもたらされました。敗戦と同時に教育にも欧米の思想が持ち込まれたのです。戦後は、**欧米諸国との技術水準のギャップが拡大していたことから、導入可能な技術革新の種が豊富に存在した**(平成12年度年次経済報告 経済企画庁)とあるように、日本が戦後、製造業で重要な技術を輸入し、いわゆるキャッチアップ(発展途上国が先進国に追いつこうと努力すること)を推進していく中で、教育でも先進諸国との教育水準のギャップを埋めようと、欧米の教育原理を取り入れていったということは容易に想像がつかます。

「個性」という西欧思想を持ち込んでみたものの、日本人の精神世界にはどうしても馴染まない。特にこの十数年「個性を生かす」教育と「個性尊重」の教育が、一連の教育改革により一層の進展を図られてきたことで、あにはからんや、ますます「個性」と「自分」の間に歪みを生じさせ、「個性」＝「自分」であるはずなのに、首尾一貫した「個性」＝「自分」がないことに若者達はパラドクスを抱いてしまっていると考えられています。

一方で、個性的であることが社会から認知され(これはテレビドラマで描かれている個性的な登場人物の影響による)ところが極めて大きいと思うのですが、市民権を持ってしまいました。「個性」に対して強い志向性を持った若者にとって、今や「個性的であること」は、社会規範のひとつと化しているといえます。「生まれながらにして備わった個性」観は、生まれながらにして持っているのではなく、こうして社会生活の中で獲得されていきます。

若者達が切望する個性とは、社会の中で作り上げていくものではなく、自分の内面へと奥深く分け入っていくことで発見されるものです。自分の本質は、この世界に生まれ落ちたときからすでに先在していると感じていますが、子供達は、個性とは一貫したもののはずだという幻想から、首尾一貫した「自分らしさ」が無いことに焦燥感を募らせ、個性的な存在たることに究極の価値を置く社会的圧力の下で、彼らは、自己の深淵に隠されているはずの潜在的な可能性や適性を見いださそうと焦っており、自らの振る舞いや態度に対して、言葉による根拠を与えることにさしたる意義を見いだせなくなっています。そして、それらは、いわば、言葉以前の内発的な衝動の発露であり、言葉によって構築された観念や信念に根ざしたものとみなされなくなっている(「個性」を煽られる子供たち 土井隆義)のです。

諸君は、内発的な衝動を、未だ見いだせていない潜在的な可能性や適正から湧き起こってくる発露だと捉え、正に

尊重しています。勉強においても、人間関係においてもそうです。なぜ学ぶのか。なぜ関係を構築しなければならないのか、言葉による根拠を持たないまま、内発的な衝動の発露を尊重し、「学び」からも「人間関係」からも逃走します。あるいは、さしたる意味も見いだせないのを承知の上で、言葉による根拠を得ようとするかのごとく発問します。「どうしてこれを勉強しなければいけないのか」、「どうして関わらなければならないのか」と。その行為に値する言葉(答え)が得られるはずもないので、諸君は「学び」から「人間関係」から逃走するわけです。仮に仕方なく勉強機に向かったり、人と関わることがあったとしても、それはペナルティーとして課された作業です。外発的動機による行為なので決して「学び」、「人間関係を構築すること」とは呼べません。

「自己に外在的な目標を目指して行動するよりも、自分の興味・関心にしたがった行為のほうを望ましいとみる。個性を尊重する社会では、自己の内側の奥底にある「何か」のほうが、外側にある基準よりも、行動の指針として尊ばれる」(「階層化日本と教育危機」荻谷剛彦)のですから、**社会的に有用であると認知されているものであったとしても「オレ的にみて」有用性が確認されなければ、あっさり棄却され**(「下流志向」内田樹)てしまうのです。

このように「個性」という幻想が我々から「学び」や「人間関係構築」を遠ざけるひとつの大きな役割を担っていることがわかります。

この十数年来、諸君の多くは、この「個性」に囚われてきました。諸君の多くが「個性的であること」を尊ぶという社会現象に晒されてきたわけです。多くの大人達もこの幻想に少なからず囚われてここまでやってきました。その象徴が『自分探しの旅』というキャッチフレーズです。

－「自分探しの旅」－

「子どもたちの『自分探しの旅』を扶(たす)ける営み」としての教育という言い方が最初に登場したのは、橋本内閣時代の中教審答申(『二一世紀を展望した我が国の教育のあり方について**』第二次答申(1997(平成9)年6月))において(同 内田樹)でした。「教育は、『自分探しの旅』を扶ける営みと言える。子どもたちは、教育を通じて、社会の中で生きていくための基礎・基本を身に付けるとともに、個性を見出し、自らにふさわしい生き方を選択していく。子どもたちは、こうした一連の過程で、試行錯誤を経ながら様々な体験を積み重ね、自己実現を目指していくのである。それを的確に支援することが、教育の最も重要な使命である。このような教育本来の在り方からすれば、一人一人の個性をかけがえのないものとして尊重し、その伸張を図ることを、教育改革の基本的な考え方としていくべきである。」**と具申しています。

通り一遍読み下す分には、大変理想的な理念が述べられているようですが、それがどんなに優れた思想でも、運用する人間次第で毒にも薬にも変わってしまう(注：こんな表現はないがひとつのレトリックだと思ってほしい。毒にも薬にもならない＝無益無害の対義語としての表現)ということは、再三諸君にお話していることです。

勿論我々大人は「個性」の育て方を知る由がありません。「個性を生かす」にしる「個性の尊重」にしる「自分探しの旅」にしる、既に備わっているものの発現を待つ、あるいは見つけ出すといった立場をとったために、「心のノート」という「自分探しを扶ける」心のガイドブックが小中学校で手渡されることになったと言っても差し支えないだろうと思います。このノートに某(なにがし)かの作業をしてきたことは、諸君の記憶に新しいはずです。諸君は一体自分の奥底に何を見つけて、そのノートに書き連ねたでしょうか。おそらく、そこに記したものが、本当の自分だと感じている人は少ないはずです。

子供の「個性」の発現を待ったり、あるいは「個性」を見つけ出すという立場をとったり、いずれにしる大人が見守ろうとする態度を採ることを続けてしまう限り、元気な子が手に負えないほどの不埒者になったり、のんびり屋が怠け者になったり、人見知りする子がコミュニケーション不足に陥ったりというようなことが個人による程度の軽重はあるにしても、これからも引き続いていくに違いないと思います。子供に内発的な衝動を「個性」の発露だと捉えさせ、その有る無しで有用性を判断させていたら、社会が社会としての機能不全に陥ってしまいます。もうそれは始まっているのですが、このままではもっとひどくなるばかりです。

－消費主体*と万能感－

「個性的であること」を求める志向とは正反対に、諸君の行動に現れる大きな共通点があります。「等価交換」もしくは「無時間モデル」と呼ばれるものです。

諸君の行動原理は消費主体としての等価交換です。しかも買い手市場で、自分が価値を認めない限り、努力という代価は支払われません。教科学習は諸君にとっておおむね価値のないものです。それは高校に入ってきて始まったわけではありません。宿題を提出しないと居残りになるとか、進級が危ういとか、外発的な動機がなければなかなか動きません。

幼いころから消費者として育てられているために、少ない代価で出来るだけ良いものを手に入れようという術には長けています。ところが、努力を積み重ねて実力をつけ、その代償を手にしようとする行為には疎い。ですから何にしても長丁場が持たない。これは無時間モデルとも言われていて、すぐに手に入らなければ欲しくないという特徴がこのように日常生活ばかりでなく学習生活の中にもはっきりと現れ、それが「学びからの逃走」と称されるようになったのです。

「学びからの逃走」によって、早くに競争から降りたものほど自己に肯定的。他者という鏡から照射して自分を鑑みることができないという傾向は、競争から速く降りたものほど顕著に現れる。消費主体から自己を立ち上げてしまったために、幼兒的な万能感は、失われずに、現在の自分の実数値をはかることなく、競争からいち早く、離脱することでなんとか万能感を守ろうとする。

万能感を守りながら、高次の欲求を希求し、それが得られないときには、自分の周囲の評価を、自分の中で『リセット』してしまう。(「階層化日本と教育危機」荻谷剛彦)

この『リセット』に適用されるのが、通俗的に理解された『自分探しの旅』ということだと思います。

内田は「自分探しの旅」のほんとうの目的は「出会う」ことにはなく、むしろ私についてのこれまでの外部評価をリセットすることにあるのではないかと思うと言っています。自己評価の方が外部評価よりも高いこと自体ことさら問題にすることはありませんが、外部評価を全否定したい人には、外部評価をいったんリセットしなければなりません。通俗的な意味で理解されている「自分探しの旅」とはどうもそういうものだ。

さらに、「ほんとうの私」というものがもしあるとすれば、それは、共同的な作業を通じて、私が「余人を以て代え難い」機能を果たしたあとになって、事後的にまわりの人たちから追認されて、はじめてかたちをとるもの。

「自分探し」という行為がほんとうにありうるとしたら、それは「私自身を含むネットワークはどのような構造をもち、その中で私はどのような機能を担っているのか」という問いのかたちをとるはずなのです。

***消費主体**:消費活動により社会から認知を受けた主体。これに対し労働により認知を受けた主体を労働主体という。

－日本人の習性－

このように「個性」と「消費主体」が我々の社会で正しく機能していかないのは、異なった文化の上に成り立った思想や資本主義経済を我々が輸入し、見よう見まねで利用しているからに他ならないと思います。我々には、必要があって外国から輸入したものを自分達に合うように作りかえていくことをせずに、自らをそれに合わせようとする習性があるようです。

自分の国に合ったシステムを作るという発想がない。外国でどうやっているかを学んできて、それを適用させようという発想になっている。その外国というのも、いわゆる先進国です。先進国というのは、ある種の物差しではかったとき、先に行っているというだけです。それぞれの国に違った物差しと価値観があるはず。そこを自覚して、自分たちの国の物差しを持たないと、子どもたちがかわいそうです。(玄侑宗久 公式ホームページ)

外国で学び、それを日本で適用するという方法は、明治維新から続くものです。それではもう上手くいかなくなっています。そのことに気がつかなければなりません。日本に自分たちの国の物差しを甦らせ、日本の尺度を取り戻すべき時が来ているのではないかと思います。諸君には、この国に新しい社会をつくりあげる担い手になってほしい。そのためには学ばなければなりません。諸君が進む道で各々がプロフェッショナルにならなければなりません。その点では平成14年(2002年)の学習指導要領が目指したものは間違っはいなかった。但し、理念は正しくとも、肝はその運用にあります。呉々も忘れないようにしてください。

《参考文献他》

「21世紀の教育はこうなる」寺脇研　玄侑宗久 公式ホームページ　「個性」を煽られる子供たち 土井隆義
「下流志向」内田樹　「階層化日本と教育危機」 荻谷剛彦